



思い出の続き

末橋敬也

思い出の続き

※

一時間に一本あるかないかの路線バスを降りる。未舗装の田舎道で絶え間なく揺れるバスから解放された僕の体を通り抜けるのは、心地よい風だった。

もう夏も終わりだというのに、まだまだ暑さの残る都会に比べ、ここには、かすかな肌寒さを感じさせる程の涼しげな風が吹いてきていた。

空を仰ぐ。昇りかけた陽が、水田の奥にある反対側の山々の陰に隠れるには、まだまだたっぷり時間があつた。

煙草に火を点けながら、来た道を確認するように振り向く。僕の目の前には、一人の少年が立っていた。

何かを訴えるような眼差しで僕を見つめながら。

「わかっているよ……」

その無言の問いかけに僕はそう答えると、少年に背を向けて、まっすぐ伸びる舗装道路を歩き出したのだった。

※※

暑い日差しを避けるように、僕は店のひさしの下へと潜り込んだ。

梅雨も明けて、空には雲一つない暑い日々が続いていた。

時刻を確認する。ズボンのポケットの中から、くしゃくしゃになったハンカチを取り出して、額から垂れた汗を拭いた。

わずかに黒く汚れたハンカチの表面をなにげなく眺めながら、涼しさを味わうように僕は大きく息を吐いた。

「まったく、ハンカチにくらいアイロンかけなさいって言ってるでしょ」

不意の声に、僕は顔を上げた。正面には、女性が一人。待ち人であり、恋人のいつきだった。

ぼうっとその姿を眺めていた僕を無視して、いつきは、僕の顔と手に持ったハンカチをかわるがわる睨み付けてから、それを僕の手から取り上げた。

「どうしてこう、だらしないんだろ」

あきれたように呟きながら、綺麗に折りたたんで僕の手の上へ乗せる。

「遅かったじゃないか」

「あ、ごめんね。ちょっと長引いちゃって。無理言うお客さんでさ……にしても、浩一にこういう趣味があつたとは以外だったな」

謝るいつきが加えた一言に、僕は思わず振り向いていた。

店先を飾るガラスのショーケースには、鮮やかな色で描かれた鳥のあしらわれた大きな皿や、それとは対照的に色あせていかにも古めかしい道具といったものが雑多に置かれていた。

別に何の気なしで僕の飛び込んだひさしの所持主は骨董屋であるようだった。

「そう見える？」

「いや、全然。だいたい落ち着きないしね、浩一は」

「悪かったよ。落ち着きがなくて」

「怒った？ ごめんごめん。今日の分は私が出すから」

「怒ってないよ。ま、今日はいつきのおごりってことは、ころよく受けさせて貰うけどね」

「はいはい、わかりました……」

不承不承にうなずいたいつきが、ふと僕の背後のショーケースを見つめた。その視線の先には、鈍い金色の光を放つものが置かれていた。

「これって、もしかして拳銃かな？」

それは、確かに拳銃だった。

「こういうので、人が殺せるんだよね。なんだか怖いな……」

いつきのその言葉を横で耳にしながら、僕はその拳銃を見つめていた。もちろん最近のものじゃない。たぶん、この前の戦争の時にでも使われたものだろう。前に一度見たことがあったから、それはわかった。

……前に一度？

いったい、いつ見たことがあるというのだろう。こんな拳銃は、はじめて見たはずなのに。

「こういち、浩一ってば」

肩を不意に揺すられて、耳元で名前を叫ばれる。

「なんだよ」

「なんだよじゃないでしょ。そういう趣味にでも目覚めたりしたわけ？」

「ん……いや、そんなんじゃないよ」

「そ、じゃあ早く行きましょうよ。なにせ、わたしのおごりなんだし」

いつきは、含みを持たせるように語尾を強める。僕は、もう一度それを見ると、いつきの後へついて、ひさしの下を出たのだった。

※

一時間ほど歩いたろうか。

僕は、辺りの風景を眺めながらアスファルトの上を歩いていた。水田の間に建つ家々を通り過ぎる。

ほとんどの家は、今風の新しいものになっていたけれど、その景色の元となっているものは、僕が離れた十七年前と変わってはいなかった。

子供の頃に遊んだ記憶が甦ってくる。いつも、ここに広がる水田のあぜ道やら、山の中を遊び回っていたのだ。

懐かしむ僕の視線の左手に、ひときわ大きな家が見えてきていた。僕は、ふっと足を止める。そして、ゆっくりと確かめるように歩を進めた。

そこには、覚えのある瓦屋根の家と漆喰で固められた大きな蔵が、あの時のまま建っていた。門にかけられた表札を確かめる。

「敷島」という名字だけが彫り込まれていた。

間違いはない。

全ての鍵は、たぶんここにあるのだろう。そう思うとわずかにためらいが浮かんだ。門の前に立ちつくす。足が前に出なかった。

引き返そうと思って振り向けた視線の先に、あの少年の姿が入る。

強制するような強い視線を僕へ向けているように見えた。

もう戻ることはできない。

僕は、意を決して門をくぐった。

※※

「子供の幻を見る？」

いつきは急に立ち止まると、僕の言葉を反芻するように繰り返した。

「うん……」

僕は、わずかにうなずいてそれに答えた。いつきの目が、いぶかしげに僕の顔を見つめる。

「からかってる……わけじゃないよね」

「そんな冗談は言わないよ」

再び歩き始めながらも、いつきは考え込むかのように、人差し指の先を唇の下の辺りに当てていた。

「働き過ぎなんじゃない？ それに最近、暑さが続いているしさ……あっ、やっぱり違うか。浩一がそんなに働くとは思えないし」

「ひどいな」

「まあ、それは冗談として……最近、大きな仕事を任されたばかりなんでしょ？ 気を張りつめすぎなのよ。だからそんなものを見たりするの」

「そうかな？」

「そうそう、そのうち気にならなくなるって」

僕もそのときはうなずいて、気にしないようにつとめた。だが、いつきのその言葉に慰められたのは、ほんのひとときでしかなかった。

普段、仕事をしているときに見ることは少ななかつたけれど、少しでも気を抜けば、その幻は僕の傍らへと近づいていたのだった。

あの、何かを訴えかけるような目を向けて。

※

門をくぐった僕は、その屋敷とも言える家を眺め渡した。それは、途切れ、薄れかけた記憶の中に残る家の姿と、ほとんど変わることがなかった。

辺りを眺めながら玄関へと近づく僕の目に、縁側でくつろぐ女性の姿が入る。

女性の目の前にある物干し竿には、色とりどりの洗濯物が掛けられていた。洗濯を終えて、ちょっとした休みと言ったところだろうか。

僕は、女性の方へと向きを変えた。白い服の女性も顔を向ける。サンダルで砂利を踏みしめる音をさせながら、僕の側へと近づいてきた。

「あの、どちら様でしょうか？」

「こちら、敷島さんのお宅ですよ」

「ええ、はい……」

「僕は、鈴里浩一といいます。それでこちらの……」

「鈴里、浩一……浩一君？」

女性は、思い当たる名前でもあったのか、僕の言葉を遮るように呟いて、まじまじと僕の顔を見つめる。訳が分からずに戸惑っていた僕へ、その女性はくすりと笑いかけた。

「子供の頃、よく弟と遊んでたわよね。由佳里よ。忘れちゃったの？」

名前を聞き、その笑みをを見て、僕はようやく思いだしていた。

敷島由佳里。僕が子供の頃、姉のように慕っていた女性だった。彼女がいたからこそ、この家に遊びに来ていたのかもしれないほどに。

「よく、わかったね」

「それはもちろん。浩一君は、私にとってもう一人の弟みたいなものだもの。あ、もう君なんてつけちゃいけないわね」

「いいよ、由佳姉にだし」

「そうそう、そう呼んでくれてたよね。秋人と一緒に。思い出してくれたんだ」

由佳姉が口にした言葉に、僕の胸がずきりと痛んだ。

秋人。それが、僕がここへ来た理由なのだから。

※※

薄暗く部屋の中には、冷蔵庫のかすかに呻る音しか聞こえなかった。

不意に電話の呼び出し音が部屋の中に響いた。ベッドの上に仰向けになったまま、僕はそれを無視する。

四度目が鳴り終わり、留守を告げる僕の声に切り替わった。

ひときわ高い音の後に、無言の間があく。ついで受話器を置く音が耳に届いた。掛け主は、伝言を吹き込むことなく電話を切ったようだ。

ほっとするように息を吐いた。ちらりと壁際の時計へ目を向け、すぐさま閉じる。

カーテンは閉められていたが、隙間から入り込む光がちょうど文字盤と針を浮き上がらせていた。

「昼か……」

ため息を一つはく。会社を休み始めて、もう一週間ばかりになる。

だが、もう動く気も起こりはしなかった。いや、動きたくなかったという方が正しいかもしれない。

目を開けるのが怖かった。目を開ければ、その前にあの少年が立っているのではないか。そう思うと何もできなくなっていた。

二ヶ月前、初めてあの少年の幻を見てから、僕の生活に安息というものは消えていた。

最初の二週間ばかりは、その視線もあまり気になることはなかった。だが、次第にその幻は、時や場所にかまうことなく現れるようになってきていた。

少しでも気を抜けば、視界のどこかに少年の姿が映るのだ。顔をうつむかせ、見上げるように、何かを言いたげな鋭い視線を僕へ向けた姿を。

僕は、あり得るはずのないその視線に怯えた。どうにか頭で納得させようと思っても、できなかった。そう、それは無駄な努力だった。

だから、諦めた。

目を閉じ。入ってくるものを妨げるしか、それを免れるすべはない。だから、僕はそうしたのだった。

「寝よう」

安堵するための唯一の方法を確かめるように呟く。だが、寝られなかった。

体はけだるかったが、頭は休息を欲してはいなかった。一週間もベッドで横になっていれば、そう簡単に寝られはしない。

ぼんやりとした僕の頭へ、玄関のチャイムの鳴る音が不意に届く。もう一度鳴ったそれに反応するように、体がびくりと震えた。

最初に思ったのは、少年の幻のことだった。すぐに思い直す。幻がチャイムを鳴らすことなどはない。

誰か来たのだ。そして、僕はその人物にすぐに思い当たっていた。

かちゃかちゃと扉の錠の上がる音がし、金属製の扉の閉まる音が高く響いた。

床のきしむかすかな音が、一定の調子を刻みながら近づいてくる。そして、ベッドの傍らで止まった。

「ねえ、浩一。どうしたのよ。いったい」

その主は、思った通りの人物だった。僕は、うっすらと目を開けて確認する。半月ぶりに見る、いつきの姿だった。

「何だよ」

「もう一週間よ。疲れてるみたいだったから、一人にしてくれって言われたときは納得したけど。だからって……」

僕には、笑いかける気力もなかった。努力はしてみたが、無駄だったようだ。心配そうな顔のいつきが、のぞき込むように僕を見つめていた。

「……あのせいなの？」

涙混じりの声でいつきが問う。僕は無言のまま、軽く頷いた。

「ずっと……」

「え」

「ずっと見てるんだ。あの、子供が。いつも」

「だから、それはあなたの気のせいよ」

額に暖かく柔らかい感触が乗せられる。けれど今の僕には、それで安らぎを得ることはできなかった。

僕の頭の中にあるのは、あの少年の幻のことだけだった。見覚えのある眼差しが、瞳の奥底に焼き付いたように思い出される。

たぶん、僕は知っていた。記憶の片隅の中に、あの眼差しを向ける少年の姿がいることを。それが、いったい誰なのか。思いだそうとするたびに、記憶は掴み所のない程に霧散してしまうのだった。

いつきの手が、髪をなでつけるように僕の頭をなでた。思考が途切れる。目を開ければ、わずかに目を紅くしたいつきが、笑みを浮かべながら僕を見つめていた。

いつきに、心配を掛けていたことはわかっていた。僕だって、こうしていたい訳じゃなかった。

けれど、いったいどうしてあんなものを見るのかすら、今の僕にはわからなかったのだ。

「どうして、こんなことになったんだろうね」

呟くようないつきの言葉に、僕は何とか記憶を反芻する。

初めて、あの幻を見たのは二ヶ月前。あれは、何の前触れもなく、唐突に僕の前に現れた。その、はずだった。

頭が痛い。

薄目をあけながら、ぼんやりと眺めていた天井へ、うっすらと幻が浮かんでくる。

あきらめがついたのだろうか。僕は、それに何の感情も抱くことはなかった。先程までの恐怖は、なぜか感じなかった。

ゆっくりと輪郭が浮き上がりながら、あの少年の姿が形づくられてゆくようすを不思議に思いながらも漫然と眺めていた。

そして、どうにかはっきりとした形を得た幻は、僕へ不意に笑みを見せたのだった。

やはり、この顔には見覚えがあった。

記憶が、わずかながら寄り集まってくる。それを掴むのを待ち受けるように。僕は、ゆっくりとそれに意識の手を伸ばした。

それは、手を伸ばそうとしても消えることはなく、しっかりとその中へ収まったのだった。

そして、あの幻の少年が、いったい何者かということを僕は思い出していた。

「あきひと」

僕は、その名前を小さく口の中で呟いた。

※

「ごめんなさい、今日はここを使ってくれる」

そう言って、由佳姉が僕を通したのは六畳ほどの部屋だった。

正面に南を向いた窓が一つ。東側には押入の襖が見え、西側には大きめなタンスが置かれていた。あとは壁へ沿わせるように細々としたものが置かれ、その上には青っぽい柄の布が掛けられていた。

「本当は、別のお部屋があるんだけど。急だったから片づいてなくて」

「いいよ、押し掛けたのはこっちだし」

申し訳なさそうにする由香姉へ笑いかけながら、僕はその部屋に入った。なんとなく見たことのある、その部屋をゆっくりと見回す。

「思い出した？ 昔、秋人が使っていた部屋なのよ」

由佳姉は言いながら、わずかに散らかったものを片づける。

僕は改めて部屋を見返した。天井の染みや、柱に付いた傷に覚えがあった。

酒の入ったおかげで、記憶をたどることを滑らかにしているようだ。

何かに覆われ、隠されていたものが、少しずつ姿を現してゆく。確かに子供の頃、僕はこの部屋で遊んだことがあるようだった。

その記憶の奥にある何か。かすかにかいま見た、闇の底知れなさに目眩がした。思わず壁に手を当てて体を支える。

「大丈夫？ ごめんなさいね。主人の相手までさせたりして。あの人、見かけに寄らず強い方だから」

酔ったせいだと思ったのだろう。由佳姉は、笑いながらそう言うと、外から持ってきた布団を部屋に敷きはじめた。

「はい、いいわよ。あしたは、好きなときに起きてくればいから」

「ありがとう。由佳姉」

「いいのよ……はあい、いま行きます」

不意に旦那さんの声が由佳姉を呼んだ。由佳姉は、面倒そうに返事をして、僕へ苦笑を見せる。

「本当に、手のかかる。それじゃあ、お休みなさい」

「うん、お休み」

部屋を出る由佳姉を見送ると、僕はおもむろに白い敷布団の上に座り込んだ。

壁にもたれて、もう一度見回してみる。これも、何か意味があるのだろうか。

考えようとしても、思考がはっきりとまとまらない。どうも、飲み過ぎのようだった。着替える間もなく、僕は滑るように布団の上に横になっていた。

※

周囲は闇だった。

ぬかるみの上に立っているような柔らかい感触が、足の裏を包んでいた。

音は聞こえなかったが、僕は、雨の中に立っていることを知っていた。

見回してみる。夜よりも暗い色に染まっていた。

辺りには、僕以外の誰もいない。いや、僕がここいるのかすら確かではなかった。

歩き出してみる。だが、どこに行けばいいのかわからなかった。ちょうど正面に向いていた方へと、僕は足を出した。

どれくらいたったのだろうか。相変わらず黒一色の世界の中では、どれだけの時間や距離が流れたのかすらわからなかった。

体の疲れを感じたわけではなかったが、変化のない状況に気が滅入っていた。立ち止まり、なんとなく息をはく。

唐突に視線を感じた。

背筋を冷たいものが走り抜け、身震いが起こる。唾を三回ほど飲み込んで、ゆっくりと振り向

いた。

そこには、あの少年が立っていた。

ちょうど目の前に、僕をじっと見つめる少年の顔がある。その時に初めて、今の自分が子供の頃の自分になっていることに気がついたのだった。

「秋人くん」

僕は、その名を呼んだ。秋人は、わずかに伏せた顔を上げる。まっすぐ僕へ視線を向けた。そして、白く歯を見せて笑顔をつくった。

先程まで感じていた恐怖は消えていた。その笑顔は、子供の頃の記憶の中にあったそれと、まったく同じだったからだった。

※

僕は、ゆっくりと目を開けた。

部屋の中は、豆球の赤い光に照らされていた。電気を消した覚えはない。たぶん由佳姉が消したのだろう。僕の体も、きちんと布団の上に寝かされ、薄いタオルが一枚掛けられていた。

上半身を起こして、息を深く吸って吐く。

まだ、夢の中にいるようだった。頭を振って、弛緩している意識を研ぎ澄ます。

夢の中の僕は、何も見えない闇に包まれて一人立っていた。ただ、雨が降っていることだけはわかっていた。

そして、あの少年。秋人の笑み。

それを見たとき、今まで抱いていた恐怖は消えていた。変わって、湧き上がって来たのは懐かしさだった。

電灯から下がる紐を引く。短い明滅のあと、白い光が僕の目を覆った。その眩しさに思わず目を閉じる。

ようやく明るさに慣れてきた。ズボンのポケットに入れたままの腕時計を取り出す。二時を少し回ったところだった。

寝直せるような気分でもなく、しばらくぼんやりと座っていたのだが、不意に尿意を感じて僕は、立ち上がった。

引き戸を開けると、廊下は当然のように真っ暗だった。うろ覚えだったが、確かこの廊下の奥のはずだった。わずかにきしむ床の音を耳にしながら暗いままの廊下を歩く。

特にどうと言うこともなく用を済ませた僕は、廊下の中程で立ち止まって、薄い月明かりに照らされていた庭を見渡していた。

ほんの少し窓を開けると、夜の冷たい風が入り込んでくる。

奥の方には、黒い小山のような蔵が見えていた。

僕は、人の家だということも忘れて、置かれていたサンダルを履くと外に出た。

酔いの残った頭で空を見上げる。月の光で邪魔されているとはいえ、都会では見ることのできないほどの星空が目の前に広がる。しばし見とれていた。

しかし、それもくしゃみ一つで妨げられる。

体が冷えてきたようだった。戻ろうと家の方へ足を向けた僕は、何かに誘われるように蔵の方

へと目を向けた。

足を止め、凝視する。

その闇の中には、秋人が白い光に包まれながらもはっきりとした姿で立っていた。夢の中で見せたあの笑顔を浮かべて。

僕は、そのまま秋人へ足を向けた。

秋人は、背を向けると歩き出す。僕は何も考えられずに、ただその後をついていただけだった。

秋人は、ちらと振り返って僕を確認すると満足そうな微笑みを浮かべた。

僕も、それへ答えるように笑顔をつくったのだった。

※

気がつく僕は、再び闇の中に立っていた。

薄い靴底は、ぬかるんだ地面の感触を変わずに僕の足の裏へ伝えていたし、周囲はやむことを知らないほどの雨音に包まれていた。

違うのは、意志に反するようにはからだは動かないということだけ。それはまるで、これから何かが起こるのかということはこのからだは既に知っているかのようだった。

だが、先程のような恐怖は全くなかった。なんの恐れも迷いも感じることなく僕は、それが起こるのを待っていた。

そして、時を測る術を持たない状況で、無限にも近い時が流れたような気分になっていた僕の目の前へ、それは不意に訪れたのだった。

周囲の闇が、滲むように溶けていく。その外に現れたのは、豪雨が吹きすさぶ山の中だった。

子どもの僕は、白いシャツを肌に張りつかせながらそこに立っていた。傘など持ってはいない。強い風に煽られた雨が、何の容赦もなく僕のからだへ叩きつけられていた。

目の前には、秋人が立っていた。彼も、僕と変わらないずぶ濡れの格好だった。

「ねえ、もう帰ろうよ」

僕の意志とは関係なく、子どもの僕は秋人へ向かってそう叫んでいた。

だが秋人は、そんな僕の言葉など聞こえないかのような表情で、じっと僕の目を見つめるとおもむろにこう言った。

「浩一くん。浩一くんも、姉ちゃんのことを好きだよ」

僕は、場違いと思えるその質問にわずかに戸惑いを感じながらも、大きく頭を縦に振ってそれに答えた。

「姉ちゃんさ、どっか行っちゃうんだ」

「本当に？」

その秋人の言葉に、子どもの僕は思わず声を上ずらせる。

「うん。もう、一生会えなくなるかもしれない」

「どうして？」

「.....男の人に連れてかれちゃうんだ。そんなの、浩一くんもいやだよ」

泣きそうになりながら、子どもの僕は何度もうなずいた。

「ねえ、ねえ、どうしたら由佳姉がいてくれるの？」

「簡単だよ、姉ちゃんを連れてく奴がいなくなればいいんだ」

「.....そうすれば、本当にいっしょにいられる？」

「うん。だから、これでそいつをいなくしちゃえばいいんだ」

そう言って秋人は、服の中を探るようにして、お腹のところから油紙に包まれたものを取り出した。

もったいぶるようにして、その包みを開ける。中にあったのは、鈍く黒い色をした固まりだった。

その正体をたずねるように、僕は顔を上げて秋人を見た。

「拳銃だよ。じいちゃんが、昔使ってたんだって」

「拳.....銃？」

「うん。これで姉ちゃんを連れて行く奴なんか、なくしちゃえるんだ」

僕は、秋人の言葉を聞きながら、じっとその黒い拳銃を見つめていた。

「ねえ.....その人を殺しちゃうってこと？」

「そうだよ。姉ちゃんを連れてく奴がいなくなれば、また姉ちゃんといっしょに遊べるんだ」

秋人が、もてあそぶように拳銃を構えながら笑いかけてくる。

「だめだよ」

僕は、大声でそう叫んでいた。驚いた表情で、秋人は僕を見つめる。

「どうして？ 浩一だって、姉ちゃんと別れたくないだろ？」

「それは、そう.....だけど。でも、殺しちゃうなんて、だめだよそんなの」

「難しいことじゃないよ。簡単だってじいちゃん言っていたもの。心配することないよ」

秋人は、僕が殺すということが難しいものだと思っていると感じたのだろう。そう言って、安心させるような笑みを再び浮かべた。

だが違う。僕は、殺すこと。人の命を奪うということの怖さをわかっていた。それが、決してしてはいけないということも。

「やめよう。そんなもの使っちゃだめなんだよ」

秋人を止めようとして、その手に握られた拳銃に手をかけた。それが、秋人の手になれば大丈夫だと僕は思ったのだ。

秋人は、僕の行動の意味を理解したのだろう。奪われないように拳銃を抱え込もうとする。

僕は、何も考えることもできず、ただ一心不乱に秋人の持つ拳銃へ手を伸ばした。秋人は、手でかばうようにして拳銃をからだで包み込む。

大雨の中で、しばらくその取りあいが続いたのだろうか。

雨音を止めるように、甲高い音が不意に鳴り響いた。

薄青色の煙が、秋人の腕の間から漂う。白いシャツが、じんわりと紅黒く染まっていく。

糸の切れた操り人形のように秋人が倒れた。

跳ねる泥の音が、ゆっくりと耳に届く。僕は、何が起こったのかすらわからずにただ呆然と立ちすくんでいた。

「秋人くん」

まだ、僕は混乱したままだった。それでも、何かしなくてはならないということだけは頭の中をめぐっていた。どうにか手を伸ばし、秋人の名を呼ぶ。

わずかの間を置いて、秋人はその呼び掛けに答えるように顔を上げた。

唇が言葉をつむぎだそうとするように動いていた。だが、それは音を持つことなく消え去っていく。

秋人のまなざしだけが、いつまでも僕の目に映っていた。

※

……僕は真っ暗な闇の中に立っていた。

いまだ夢の続きを見ているのだろうか。思わず両手で顔を包み、確かめるように自分の体を探った。

夢ではない。いまここにいるのは、現実の鈴里浩一だった。

そして、鼻に感じる埃臭い匂いも、これがあの夢の続きではないことを教えていた。

見回してみる。背後の壁の隙間から、ほんのりと薄明かりが入り込んでいた。

恐る恐る近づいて、その正体を確かめる。それは、大人一人が何とか入ることが出来るほどに開けられた扉から入り込んでくる月の光だった。

満月をいくばくか過ぎた程度の光とはいえ、暗いこの場所に比べれば、その光は明るすぎるものだった。

僕は、ため息を一つはいて、目に滲んだ汗を指でぬぐった。落ち着こうとするつもりで吸い込んだ空気にむせて、軽く咳き込む。

どうやら、ここは蔵の中らしかった。闇に馴れた目に、積み上げられた箱がぼんやりと見える。

どうやって入ったのか、ここにいる僕自身にもわからなかった。ここにいったい何があるのだろうか？

考えめぐねる僕を導くかのように、秋人がずっと闇の中に現れた。

じっと僕を見つめるまなざしは、夢の中でのそれと一つの違いもない。

「いったい、何を……」

言いかける僕を無視するように、秋人は頭を右の方へ向ける。一点を示すように瞳はじっと動くことはなかった。

秋人の視線をたどるようにはからだ動かす。段ボールの積まれた上に黒い何か置いてあるようだった。

僕はゆっくりと足を出して、そこへ近づく。黒く見えたそれは、うっすらと埃をかぶった昔の小さな机だった。

心臓の鼓動が早まる。

ここに何があるのか。僕には、もうわかっていた。震える指を、どうにか引き出しの取っ手にかける。

引き開けたその中には、赤茶けた紙に包まれたものが置かれていた。それを恐る恐る取り上げ、包みを開く。

僕は、しっかりとその中のものを持ち上げた。

※※

僕は、電器店におかれたテレビのニュースを耳にしながらぼんやりと歩いていた。

表通りから裏に入り、二つ目の角を曲がったところで僕は立ち止まると顔を上げた。

レンガ色のタイルが一面に張られたマンションがそこにある。

人気のない出入口を進み、いつものように部屋番号を押した。聞き慣れた声が、元気そうに返事を返してくる。

自動ドアが開く。目の前にあるエレベーターに乗り込んだ僕はボタンを押した。

いつきは、ドアを開け放して僕を待ち構えていた。僕は、いつきへ笑いかけながらも歩調を変えることなく近づく。

「もう、大丈夫なの？」

玄関の前でいつきが抱きついてくる。僕は安心させるように髪を撫でた。

ひとしきりそうしていた僕は、ふと視線をいつきから外すように正面へ向けた。いつきの肩越しに、点けられたままのテレビが見えた。そして、その音がはっきりと耳に届く。

『……県巳時川村で起こった殺人事件は、一夜明けた今もその捜査に進展は見られてはいないようです。被害者は同村に住む主婦、敷島由佳里さん37歳。敷島さんは……』

部屋の中に、秋人が現れる。その顔は、満足そうな笑顔だった。

「大丈夫、もうすぐ僕たちも行くよ。これで、みんないつまでも一緒だね」

僕はそう秋人に言葉を返す。いつきを抱く左腕に力をかけた。右手を自分の背中へ回す。

ズボンに差し込まれたものを僕はしっかりと握った。

冷たい感触がわずかに背筋を震わせる。

いつきの不安そうな瞳が僕を見つめていた。

「大丈夫、もう何も心配はないよ」

安心させるような微笑みをいつきにみせながら、僕は右手の人差し指に力を込めた。

「そう、みんな一緒にいられるんだ……」

(了)